

学校编码: 10384

分类号: _____

学号: 20061150361

UDC _____

厦 門 大 学

硕 士 学 位 论 文

Philosophy から哲学へ

—西周を中心とする近代日本翻訳活動の一考察

从 Philosophy 到哲学

—以西周为中心的近代日本翻译活动考察

陈晓隼

指导教师姓名: 吴光辉 副教授

专业 名称: 日语语言文学

论文提交时间: 2009 年 4 月

论文答辩时间: 2009 年 月

学位授予日期: 2009 年 月

答辩委员会主席: _____

评 阅 人: _____

200 年 月

厦门大学学位论文原创性声明

本人呈交的学位论文是本人在导师指导下,独立完成的
研究成果。本人在论文写作中参考其他个人或集体已经发表
的研究成果,均在文中以适当方式明确标明,并符合法律规
范和《厦门大学研究生学术活动规范(试行)》。

另外,该学位论文为()
课题(组)的研究成果,获得()课题(组)
经费或实验室的资助,在()实验室完成。

(请在以上括号内填写课题或课题组负责人或实验室名称,
未有此项声明内容的,可以不作特别声明。)

声明人(签名):

200 年 月 日

厦门大学学位论文著作权使用声明

本人同意厦门大学根据《中华人民共和国学位条例暂行实施办法》等规定保留和使用此学位论文，并向主管部门或其指定机构送交学位论文（包括纸质版和电子版），允许学位论文进入厦门大学图书馆及其数据库被查阅、借阅。本人同意厦门大学将学位论文加入全国博士、硕士学位论文共建单位数据库进行检索，将学位论文的标题和摘要汇编出版，采用影印、缩印或者其它方式合理复制学位论文。

本学位论文属于：

（ ） 1. 经厦门大学保密委员会审查核定的保密学位论文，
于 年 月 日解密，解密后适用上述授权。

（ ☒ ） 2. 不保密，适用上述授权。

（请在以上相应括号内打“√”或填上相应内容。保密学位论文应是已经厦门大学保密委员会审定过的学位论文，未经厦门大学保密委员会审定的学位论文均为公开学位论文。此声明栏不填写的，默认为公开学位论文，均适用上述授权。）

声明人（签名）：

200 年 月 日

要 旨

近代日本を代表する哲学者西周は、欧米思想との出会いを通じて日本の伝統文化を深く反省し、新しい学問体系を模索した。このプロセスの中で、もっとも注目すべき現象の一つは、「哲学」という言葉の翻訳ということである。言い換えれば、この「哲学」という言葉の裏には、近代日本における西洋文化への翻訳と理解の問題が隠されている。また、「性理学」、「ヒロソヒ」、「希哲学」という幾つかの段階を経て、「philosophy」の定訳として、「哲学」という言葉が定着するようになった。このプロセスは、儒学から西洋の学問へ転換することを反映している。したがって、「哲学」という言葉の翻訳の一考察を通じて、近代日本における文化的転換が考えられるであろう。

翻訳とは何か、近代日本の歴史や文明の転換をよく考えて見れば、日本という主体の意識を持ちながら、西洋の文明と対話を行っているのである。したがって、西洋文明の翻訳という原点から出発する日本の近代は、一つの翻訳の時代であるといえるであろう。「philosophy」から「哲学」という定訳の確立までのプロセスから、西洋の学問ないしは文明観念を受容した日本が、それらを日本的に変容し、転換したとも考えられるであろう。この「哲学」というキーワードの存在は、文明開化、或いは「翻訳」の時代を象徴する代表的なものである。

本論では、このような問題意識を持ちながら、西周の翻訳活動についての先行研究を踏まえ、西周の原典資料や文献資料に立脚し、「哲学」という翻訳語の定訳のプロセスを分析することを通じて、翻訳の可能性を明らかにしたい。しかも、翻訳主体の思想基礎と時代背景は、西洋文化の摂取と翻訳活動などの相互関係を検討することにする。詳しく言えば、第一章は西周の思想と時代背景および翻訳活動を述べる。第二章は「哲学」という言葉が選択、定着の過程を解明する。第三章において、近代中国を代表する知識人である嚴復と梁啓超の翻訳活動を考察し、西洋の翻訳を時代のコンテクストとして把握していく。さらに、西周の翻訳活動の意義と「哲学」という言葉の意義を明らかにしたい。結論において、翻訳の本質は、言葉の問題ではなく、文化の対話なのである。

「哲学」という翻訳語の考察を通じて、近代日本の知識人は漢語を利用して、西洋の学問の移植に努めていた。そこから、近代における異文化間の対話を実現させる「翻訳」の役割が考えられるであろう。

キーワード：西周；哲学；近代翻訳活動；和訳

摘要

西周是近代日本具有代表性的哲学家，他通过接触西方思想，深刻反省日本传统文化，摸索出了新的学问体系。在这一过程中，最引人注目的现象之一，即是“哲学”一词的翻译。换句话说，在“哲学”一词中，隐藏着近代日本对西方文化的翻译和理解问题。西周在翻译“哲学”这一概念之际，曾经采用了“性理学”、“希哲学”等一系列译语，最终确定为“哲学”，这一过程亦意味着近代日本从儒学向西学的一大转型。因此，通过对“哲学”一词究竟是如何被翻译的历史加以考察，我们足以进一步探索近代日本文化转型的问题。

翻译是什么，如果从近代日本的历史、近代日本的文明转换的角度来思考的话，应该是日本抱着一种自身的主体意识与西方文明展开对话的过程。因此站在翻译西方文明这一出发点，可以说近代日本就是一个翻译的时代。从“philosophy”到“哲学”的定译过程，也可以看作为是日本接受西学以及西方文明观念，并将其转变成日本式的学问和文明的过程。因此，“哲学”这一关键词，可以说是近代日本的文明开化或者“翻译”时代的一个象征。

抱着这样的问题意识，本文依据西周翻译活动的先行研究，并立足于西周的原著和文献资料，通过分析“哲学”一词的定译过程，来探寻翻译的可能性问题，并探讨翻译主体的思想基础、时代背景与摄取西方文化和翻译活动之间的关系。具体而言，第一章就西周的思想、时代背景以及翻译活动进行考察，第二章，阐述“哲学”一词的选择和定译的过程。第三章，通过考察近代中国知识分子的代表——严复和梁启超的翻译活动，并且将西学的翻译作为时代背景加以理解，由此来进一步阐明西周翻译活动和“哲学”一词的意义。作为结论，本文首先确认“翻译的本质不是语言的问题，而应该是文化的对话”，通过对“哲学”这一译语的考察，来阐述近代日本知识分子是如何利用汉语词汇，来努力引入西方学问的问题。由此确认翻译的价值在于实现异文化之间的对话。

关键词： 西周； 哲学； 近代翻译活动； 和译

目次

要旨	i
序論	1
第一節 西周の先行研究	1
第二節 本論の問題意識と組み立て	3
第一章 西周の翻訳活動	5
第一節 西周の生涯と思想背景	5
第二節 明治初期の「翻訳」	8
2.1 時代の急務としての「翻訳」	8
2.2 漢字翻訳語の時代	10
第三節 西周の翻訳活動	13
3.1 「哲学」を中心とする西周の学術体系	13
3.2 西周による翻訳語の成立とその考察	14
第二章 philosophy から哲学へ	16
第一節 「philosophy」の発見	17
1.1 希哲学	17
1.2 性理学	18
1.3 ヒロソフル	18
1.4 哲学	19
第二節 「哲学」という訳語の選択と定着	19
2.1 「philosophy」をたずねて	19
2.2 「哲学」の登場	20
2.3 百学連環としての哲学	20
2.4 教学としての「哲学」	21

第三章 近代における和訳の意義-----	23
第一節 時代のコンテクストとしての「翻訳」-----	23
1. 1 嚴復の翻訳活動-----	24
1. 2 梁啓超の翻訳活動-----	26
第二節 西周の翻訳活動の意義と評価-----	28
第三節 「哲学」という翻訳語の意義-----	32
結論-----	35
参考文献-----	37
謝辞-----	39

目 录

摘要	i
序言	1
第一节 西周的先行研究	1
第二节 本文的问题意识和文章结构	3
第一章 西周的翻译活动	5
第一节 西周的生平和思想基础	5
第二节 明治初期的“翻译”	8
1.1 作为时代首要任务的“翻译”	8
2.2 汉字译语的时代	10
第三节 西周の翻訳活動	12
3.1 以“哲学”为中心的西周的学问体系	13
3.2 对西周译语的考察	14
第二章 从 Philosophy 到哲学	16
第一节 发现“philosophy”	17
1.1 希哲学	17
1.2 性理学	18
1.3 ヒロソフル	18
1.4 哲学	19
第二节 “哲学”一词的选择和定译	19
2.1 发现“philosophy”	19
2.2 “哲学”的登场	20
2.3 作为百科全书的“哲学”	20
2.4 作为教育的“哲学”	21

第三章	近代“和译”的意义-----	23
第一节	作为时代背景的“翻译”-----	23
1.1	严复的翻译活动-----	24
1.2	梁启超的翻译活动-----	26
第二节	西周翻译活动的意义和评价-----	28
第三节	“哲学”译语的意义-----	32
结论	-----	35
参考文献	-----	37
致谢	-----	39

厦门大学博硕士论文摘要库

序 論

明治時代の翻訳について、文化学者加藤周一は、かつて次のように評価を与えている。

十九世紀の後半、明治維新の前後の三、四〇年の間に、日本社会は、政府も民間も合わせて、膨大な西洋の文献を日本語に訳した。それは量において膨大であったばかりではなく、また領域においても網羅的に広汎であった。法律の体系から科学技術の教科書まで、西洋の地理や歴史から国際関係の現状分析まで、これほど短期間に、これほど多くの重要な文献を、訳者の文化にとっては未知の概念をも含めて、およそ正確に訳し了せたことは、実におどろくべき、ほとんど奇跡に近い偉業である。明治の社会と文化は、その奇跡的訳業の基礎の上に成立した。^①

というように、翻訳の事業を、明治の社会と文化が成立する「奇跡」とも言える基礎と看做して、明治時代の西洋文献の翻訳を高く評価した。

よく知られているように、日本にとって、明治時代というのは、東洋文化、或いは中国文化から西洋文化へと転換していく重要な時期である。日本は積極的に西洋文化を取り入れ、西洋文化を「翻訳」してきた。言い換えれば、「翻訳」という言葉は、この時代を代表するキーワードの一つとなってきた。

第一節 西周の先行研究

西周（1829-1897）は近代日本の先覚的指導者であるとともに、「東西思想の新しい出会い」という十九世紀中葉の世界史的渦中にあった人物で、西周の研究、特に彼の翻訳活動に対する研究は、日本を越えて国際的意義を持っている。本論で、その時期の翻訳の可能性と翻訳活動の近代文化に対する意義を掘り下げようとしたのも、そのような見地からである。

1 西周の全般的研究

^①加藤周一 丸山真男・『翻訳の思想』「M」・岩波書店 2000:342.

まさに、西周の研究者の一人宇野重昭氏によって指摘されたように、西周の研究が今日にいたるまで、おおよそ四つの時期に分けられる。

第一は、西周に関する年譜・伝記が始めて成立した時期である。代表的なものが森鷗外の「西周伝」である。この森鷗外の伝記によって、西周は一般に知られているようになった。

第二は、第二次世界大戦直後の、丸山真男『日本政治思想史研究』（東京大学出版会、1951 年）を中心とする荻生徂徠に対する近代化論的解釈に立つ西周論である。この見地から見ると、西周は「脆弱な」明治啓蒙思想家ということになり、相対的に低く評価されることになる。とりわけ、福沢諭吉と比べると、西周は重視されなく、はるかに「群小」というものと矮小化された。

第三は、1960 年以後の本格的な『西周全集』の刊行であり、これにより学術的な西周研究の交流と発展が可能となった。一般には大久保利謙編『西周全集—第四巻』（宗高書房）が広く使われている。その中で、小泉仰『西周と欧米思想との出会い』（1989 年）、蓮沼啓介『西周に於ける哲学の成立』（有斐閣、1987 年）などの本格的な研究書が現れた。

第四は、西周研究者の連携の始まりで、現在、島根県立大学の西周研究プロジェクトが、その連携軸としての役割を果たしている。島根県立大学の西周研究グループが、西周の“統一科学論”から“西周の思想体系”および“西周と同時代の思想家の関係”までに注目したのである。2005 年に出版した『西周と日本の近代』は、現段階における西に関する総合研究の成果といえよう。^①

2 西周の「借用語」の研究

よく知られているように、「哲学」、「概念」、「客観」、「理性」、「感性」、「心理」、「帰納」など、現代の重要な学問的用語が、日本語訳されたのは、西周の訳・仮訳を嚆矢とする。言い換えれば、哲学者としての西周の研究とともに、翻訳者としての西周の研究を見逃してはならない。このような西周翻訳の先行研究として、訳語を全面的に扱ったものには、手島邦夫の研究が挙げられる。

手島邦夫の研究といえば、言語学の角度から西周の漢語的訳語の出典、使用

^① 島根県立大学西周研究会・『西周と日本の近代』「M」・ペリカン社 2005：3-5。

例を分析し、それらを借用語、新造語、転用語として翻訳の意義を求める。すなわち、手島邦夫は、①メドハースト (Medhurst) やロプシャイト (W. Lobscheid) の「英華字典」や洋学書、②幕末期の英和辞書、③蘭学書や蘭和辞書、或いは蘭学者による新造語、④同時代の知識人・啓蒙思想家の借用した語、といった「利用経路」を介して調査し考察を行ったのである。^①ただし、言葉の由来の研究を中心としたこの言語学的研究は、西周の訳語の特色や出自、英和辞書や英華辞書、漢籍文献からの影響関係、訳語の変遷などを明らかにしたもので、西周の翻訳活動と近代日本のパラダイム・チェンジの問題には触れていない。

それゆえ、本論では、「翻訳学」という立場から、言葉の翻訳を一つの問題として考え、さらに、言葉の翻訳の裏に隠されている西洋文化の解釈、或いは、それを「翻訳」として理解し、明治時代における東洋文化と西洋文化との「対話」の意義をも考えてみたい。

第二節 本論の問題意識と組立て

「哲学」という言葉は一見、学問体系の一つのように見える。しかし、それは決して一学問の問題ではない。西周はそれを「百科を統括する」ものとして考え、儒教的、東洋的思想の革新的解釈によって西欧当時のトップレベルの“philosophy”の概念を理解しながらも、なお、儒教の枠組みを超えて、当時の人類的、世界的価値・意識に接近する可能性を秘めていたこと、あるいは西欧的価値観に立つかぎり普遍的ともいふべき思想をもとに、西周なりに独創的に“哲学”を創出し導入しようとしたのである。それによって、近代日本の知の方向設定をしたといえよう。

それゆえ、本論の「哲学」という訳語の研究は、ただ言葉の翻訳の研究だけではなく、「哲学」という言葉の翻訳を介して、明治時代の日本文化の転換、或いは東洋と西洋との対話という立場から、明治時代の知識人がいかに西洋の文化を理解し、受容し、さらにいかにして東洋の伝統学問との結合を求めたかを明らかにしようとするものである。

^① 手島邦夫・「西周の借用語について」「J」——島根県立大学西周研究会編『西周と日本の近代』「M」・ペリカン社 2005：74。

このような問題意識を持ちながら、本論では、第一章は西周の思想と時代背景および翻訳活動を述べる。第二章は「哲学」という言葉が選択、定着の過程を解明する。第三章において、近代中国を代表する知識人である嚴復と梁啓超の翻訳活動を考察し、西洋の翻訳を時代のコンテクストとして把握していく。さらに、西周の翻訳活動の意義と「哲学」という言葉の意義を明らかにしたい。結論において、翻訳の本質は、言葉の問題ではなく、文化の対話なのである。「哲学」という翻訳語の考察を通じて、近代日本の知識人は漢語を利用して、西洋の学問の移植に努めていた。そこから、近代における異文化間の対話を実現させる「翻訳」の役割が考えられるであろう。

本論の研究の方法として、西周の著作や書簡と、研究者による西周の考察に依拠しながら、歴史考証法と事例分析方などの研究方法を通じて、翻訳文化史、翻訳思想史という新しい視野から、西周を代表とする近代日本知識人の翻訳活動を研究することにする。さらには、本論の意義を求めるならば、すでに話したように、決して一語の翻訳に限らない。むしろ、この翻訳文化史、翻訳思想史から、西洋文明のインパクトによる東洋人の思考様式或いは行動様式の変換、さらに他者と自己の対話にまで導くように考えられる。しかも、このような文化の対話は、グローバル化が進んでいる今日においても依然として再生の意義が求められる。

第一章 西周の翻訳活動

第一節 西周の生涯と思想背景

西周は、1829 年、石見国（島根県）津和野藩四万三千石の城下森村堀内に、外科医の長男として生まれ、1897 年大磯の別荘で生涯を終った。その六十九年間は、日本歴史上、国の存亡をかけた一大転換期であり、国の近代化が急がれる時代であった。

西周は最後の将軍である徳川慶喜のブレーンとなるほど、その時々の歴史の先端にあって活躍した人物の一人であり、和、漢、洋にわたる深い学識、学問の構想力と分析力から、日本における「独創的な哲学者」と言われ、近代日本哲学の祖とも言われている。

1 西周の誕生

西周は幼名を経太郎、養老館学頭の山口剛斎が良とした、専の字を用い寿専と名乗った。名は時懋、後に魯人、蓄髪して修亮と改称したが、ある時、幕府の公文書に、周助と書かれていたのでこれに従った。明治以降、周と称した。号は鹿城、天根、甘寝舎などである。

4 歳の時、住居を津和野、杉片河に移した。この年、祖父より『孝経』を習い、6 歳の時には『大学』『中庸』『論語』『孟子』の四書を教わった。このときの思い出として、西周はかつて「余九歳ノ時祖父歿ス、余ヲ撫シ極メテ恩アリ、余小少好学ノ志蓋其薰陶ニ出ツ」^①と語った。すなわち、漢学という伝統的学問は、西周が生涯にかけて好学——西洋学問をも好む——する性格を養ったといえるであろう。

2 藩校養老館時代

1840 年、12 歳で津和野藩校養老館へ入学した。代々の好学の藩主に恵まれたことと、この養老館の教育環境が、後の西周を形成する上で、大きな影響を与えた。養老館に学んだ者のうち、西周以外には森鷗外（明治時代の文豪）、

^①大久保利謙・「西家譜略」、『西周全集』第 3 巻「M」・宗高書房 1981：112。

Degree papers are in the "[Xiamen University Electronic Theses and Dissertations Database](#)". Full texts are available in the following ways:

1. If your library is a CALIS member libraries, please log on <http://etd.calis.edu.cn/> and submit requests online, or consult the interlibrary loan department in your library.
2. For users of non-CALIS member libraries, please mail to etd@xmu.edu.cn for delivery details.

厦门大学博硕士论文摘要库